

生成AI騒動のなかで

勝 又 浩

最近人はが集まれば生成AIなるもの話になることが多い。先日もある会合の後の雑談で、これからは弁護士、裁判官もいらなくなりそうですよ、と言った人があってアツと思った。彼は高裁の元判事だ。そうか、そうなれば、あのおつかない裁判員制度なども廃止になるかなと、連想はひろがる。私などは自分のやってきた仕事から、まっ先に教員や教育カリキュラムの一部は、特に大学などでは顕著に不要になる部分が多いだろうなどと考えていたが、こんなふうに、誰もが、まず自分の関わる領域で考えてしまうのであろう。

それで、別の日の雑談だが、これはお医者さんもいる会だった。歯科医のように全てに具体的な治療技術の伴う部門は影響が少ないだろうが、内科外科などの手術以前の段階では医師が相当数不要になるだろう、という話になった。私の最近の経験でも、外科も眼科も、脳神経内科という部署でも、診断はしたが、積極的な治療はなく、要するに自然治癒を待

っただけであった。こんなことなら、一〇分診てもらうために六〇分も九〇分も待つような病院通いなどしなくてよい、家のパソコンの前で問答をすれば用は足りる、となることだろう。

あるときの雑談では、AI問題を集めたテレビ「クロージアアップ現代」を見たという人がいた。そこで示された様々な例のなかに、ある地方自治体の首長が議会での答弁をAIに作らせたという例と、当の番組がその番組に相応しいカバー音楽というのか、ドラマならばテーマ音楽に当たるものをAIに作らせたという話があったという。議会の答弁の方は、そういう誤魔化しがあったと言うのではなく、首長が読んでみせてこういう問題があると指摘したのだそう。テーマソングの方は、出来上がったものを放送はしなかったよ。うで、曲の他に歌詞もあったのか等の詳細は分からない、と。そういえばAIが音楽を作るという事実は、他の番組でも見たことがあった。そこでは造られた美空ひばりが、作られた美空ひばりの新曲を歌っていた。こうなれば失業する作曲家もずいぶん出ることだろう。

音楽は今、言うならば消耗品になっている。テレビでもラジオでも、すべての番組にカバー音楽が付いて、まるで商品の包装紙のように使われている。なかには古典曲からの引用や応用もあるが、それでも著作権のことを考えればAI利用の方がはるかに簡単に済むことだろう。そういえば音楽関係

の人たちが著作権のことを言い始めたようで宜なるかなではあるが、音楽での引用と創造の関係は、文章のそれよりも難しいかもしれない。

あるいは、少し性質が違うがこんな例もある。テレビの大河ドラマ「鎌倉殿の13人」のテーマ音楽には「新世界より」等、著名な西洋古典曲が引用されていて奇妙な違和感があった。AIに任せればこういう時代錯誤は生まれなかつたらうに、といま思う。

こんなふうに、教員もいらない、裁判官もいらない、医師も作詞作曲家もいらない、と次々に考えていって、そうだ、一番要らないものは政治家ではないか、と思いついた。なんでこんな人が、という大臣を教えていったらきりがないが、そこで大胆に言ってしまう、最も不要、というよりぜひとも無くしてほしいのが総理大臣や大統領、書記長委員長といった類の存在だろう。こうした最高指導者たちをAIに切り替えれば空しい選挙などもなくすむ。そして権力欲や情実に支配されず、世界の産業経済、文芸文化の万全な情報の上に立って、AIが正しい判断をしてゆく、これは人類の究極の夢ではないだろうか。ぜひとも国際条約で決めてもらいたいものだ。等々、私があまり大真面目に言ったものだから、そうだそうだ、それが可能かどうか、いつごろ実現できるか、早速AIに尋ねてみるべし、と交ぜつ返されてしまった。

しかし、冗談ではなく、機械のことも科学のことも分から

ないながら、私は生成AIというものの出現に心底不安をいだいている。最近の新聞報道によれば、今後四年以内に「超知能AI」というものまでできるのだと言う。念のため言えば、この「超」は人間の知能を超えた、という意味の「超」である。先に人造美空ひばりのことを言ったが、美空ひばりを造るくらいだから、きつとフランケンシュタインを造る奴も現れるに違いないのだ。これはもう、原子力に次ぐ危険な発明だ。原子力は、間違えば環境、地球自体の破壊になりかねないが、AIなるものは確実に人類の新しい神様となって、人間社会を、人間そのものを壊してゆくだろう。

*

これはごく最近のことだが、ある老舗の同人雑誌にとても達者な書き手が現れて、皆が感嘆するような作品を次々に発表した。しかし間もなく、今度の作品は小説家Nの何々という作品を参考に書いた。時代場所など変えてはあるが、基本の構成などはそこから借りている、と本人が打ち明けた。彼も学習のつもりで始めたことではあったが、こういう作品があつてよいものか、許されるものかどうか自信がなく、皆の意見を聞きたいということであつたようだ。それで古い会員が猛反対、自分たちは巧拙は別にして自分の創作を載せてきた、この雑誌はそういう雑誌だと強く主張した。それで書いた本人も納得、次からはそういう作品は載せないということだ、この話は一応落着となった。

こんな経過を聞いていた私も、どう思いますかと問われ、件の作品、そのオリジナル作品とそれに基づいた改作と併せて読んでみることにした。この作者はもとも他の作品でも巧みな書き手だが、この改作も立派なものであった。まず、言うならばみごとに換骨奪胎されていて、模倣、模作という域を越えている、という事実があった。結局、これはこれによいではないか、と私には思われたのだ。次に元の小説が、作者は教科書にも載るほどの人だが、採られた作品は数ある短編のなかの一つで、よっぽど作家を読み込んでいる人でもなければ知らないだろう、という面もあった。つまり、本人が黙っていれば誰も気付かないまま通ったということでもある。

しかし、それはいつそうタチが悪いという意見もあるだろうが、事実はそう単純ではない。そんな例はかつての同人雑誌評時代にもよく出くわしたのだ。

いわゆるパロディー作品も含めて、オリジナルと改作という例は限りなく存在する。こういう関係の源流は、近代文学では明治の翻案ものに始まるだろう。最近の研究では、貫一お宮の記念碑まである、あの「金色夜叉」が実はアメリカの大衆小説の翻案だったという事実がある。オリジナルの方は忘れられた作品だが、改作の方は一世を風靡し、歴史に記録される作品になった例だと言ってもよい。こうした翻案は、実はいつでもあつて、私は偶然、小沼丹の短編にそれを見つけ

てがっかりしたこともあつた。小沼丹ならば、「ハムレット」も「ロミオとジュリエット」も実はオリジナルがあつたうえでのシエックスピアによる改作だったと知っていたかもしれない。しかし尾崎紅葉はおそらく、歌に本歌取りがあり、能、文楽、歌舞伎に交換改作がたくさんある日本の文芸伝統に従っていただけであつたらう。

*

さて、私は何を言いたいのか。

むろん、AIがいても簡単に小説も作ってしまうという現実に我々はどう対すべきか、という問題を考えている。すでに、アメリカでのことだと聞くが、ある出版社は一般からの持ち込み原稿は断ることにしたという話もある。読んで、個人の作なのかAIによるのか判別がつかないからだと言う。こうした例から考えてみれば、日本の文芸誌各誌の新人賞なども早晚廃止になるのは目に見えているように思われる。ただしこれは、文学作品は個人の創作でなければならぬ、という原則の上に立てば、という話である。しかし、先に言った音楽の場合のようなことは既に文学作品にもたくさんあるのだ。

最近、映画「旗本退屈男」のポスターをまとめて見る機会があつたが、人気にこたえて同工異曲の作品が次々と作られたのだ。よく似た現象としての「フーテンの寅さん」シリーズ等もある。こうした人気連作の脚本台本などもこれからはAI

に任せた方がずっと効率が良い、ということになるだろう。ここでも失業する。『文豪』がたくさん出ることになるわけだ。それで思い当たるのは、人気シリーズ映画式に自己再生産する作家もいるという事実だ。今、若いファンたちが次のノベル文学賞受賞を待っている作家などは、ある時期から毎度「またこれか」と思わせられる展開が多いので、私は読むのをやめてしまった。この、故美空ひばりの新曲のような同工異曲、自己再生産現象は人気大衆小説家にはよく見られる現象であるが、たとえば谷崎潤一郎や川端康成等々には見られないことだ。「癡癡老人日記」や「たんぼぼ」等々、彼ら晩年の大胆な挑戦作を思い出してほしい。これらはまさに「またこれか」をこそ自らに固く禁じた結果であるだろう。

先の音楽の場合と同様、メディア、ジャーナリズムの膨張とともに文学もどんどん消耗品化されてきた。そうしたなかで真の銘作を産むのも探すのもますます難しくなるばかりだ。しかし一方、言うまでもないが、どんな時代が来ても人は文学的営為をやめることはない。私は中島敦の描いた寓話「狐憑」を思い出す。村の人気物語作者シヤクは自分が働かないばかりか村人たちにも働くことを忘れさせるので長老たちに忌避され、殺されてしまった。そして慣例に従って大鍋で煮られて人々に食べられてしまった。逆に言うとなんと人類最初の物語作者は村人たち全員の血肉となってしまったのだ。

読者のごく限られた『純文学』という領域がある。笑うなか

れ、それが今よりもっと先鋭化して、結局は現在の同人雑誌のようなかたちで、非AI文学が残ってゆくだろう、というのが、私の目下の観測、判断である。

(文芸評論家)